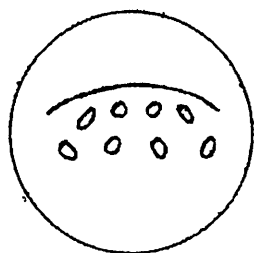


東京蜘蛛談話会誌

KISHIDAIA

No. 11



東京蜘蛛談話会

東京都日野市豊田1,896 萱嶋泉方

PHONE : 0425-81-7128

奄美大島のクモ

大河内 哲 二

奄美大島のクモについては筆者がATYPUS Nos. 49-50 に述べたように、これまで11編の記録が発表されており117種が記録されている。筆者はその後も引き続き奄美大島のクモを採っているが、今回、2人の方から多数の奄美産クモ類の標本の提供を受けた。ここにその同定の結果を発表する。

南西諸島のクモは本格的記録も少く、東南アジア、中国の文献が入手しにくいなどの問題があり、まだまだこれから研究の進む地域である。今回の標本の中にも日本新記録と思われるものもあり、これらはゆっくり検討したいと思っている。

貴重な標本を提供して下さいました千石正一、石山鉄幸両氏に対して心から感謝の意を表す。又今後南西諸島へ出かける方の御協力をお願いする次第である。

千石正一氏採集品

1. *Conopistha fissifrons* (O. P. Cambridge) チリイソウロウグモ
2. *C. bonadea* Karsch シロカネイソウロウグモ
3. *Neoscona theisi* (Walckenaer) ホシスジオニグモ
4. *Cyrtophora moluccensis* (Doleschall) スズミグモ
5. *Argiope amoena* L. Koch コガネグモ
6. *Nephila maculata* (Fabricius) オオジヨロウグモ
7. *N. clavata* L. Koch ジヨロウグモ
8. *Cyclosa insulana* (Coeta) シマゴミグモ
9. *Tetragnatha javana* (Thorell) オナガアシナガグモ
10. *T. caudicula* (Karsch) トガリアシナガグモ
11. *Runcinia albostrigata* Boes. et Str. シロスジグモ
12. *Rhene atrata* (Karsch) カラスハエトリ
13. *Marpissa elongata* (Karsch) ヤハズハエトリ
14. *Araneus lugubris* (Walckenaer) コゲチヤオニグモ

石山鉄幸氏採集品 (○印は奄美大島新記録)

1. *Uloborus varians* Boes. et Str. ウズグモ
2. *U. sybotides* Boes. et Str. カタハリウズグモ
3. *U. geniculatus* (Oliver) ミナミウズグモ
4. *Conopistha fissifrons* (O. P. Cambridge) チリイソウロウグモ
5. *C. bonadea* Karsch シロカネイソウロウグモ
6. *Theridion japonicum* Boes. et Str. ヒメグモ
7. *T. tepidariorum* C. Koch オオヒメグモ
- 8. *Linyphia longipedella* Boes. et Str. アシナガサラグモ
9. *Smeringopus pallidus* (Blackwell) ニウレイグモトドキ

KISHIDAIA NO. 11

10. *Araneus subpullatus* Boes. et Str. ヘリジロオニグモ
11. *Neoscona theisi* (Walckenaer) ホシスジオニグモ
12. *N. nautica* (L. Koch) イエオニグモ
13. *Argiope minuta* Karsch コガタコガネグモ
14. *Cyrtarachne nagasakiensis* Strand シロオビトリノフンダマシ
15. *Gasteracantha mammosa* C. Koch チブサトゲグモ
16. *Cyrtophora moluccensis* (Doleschall) スズミグモ
17. *Nephila clavata* L. Koch ジョロウグモ
18. *Cyclosa insulana* (Oosta) シマゴミグモ
19. *C. sedeculata* Karsch ヨツデゴミグモ
20. *C. mulmeinensis* (Thorell) トゲゴミグモ
- 21. *Meta reticuloides* Yaginuma ヤマジドヨウグモ
22. *Leucauge blanda* (L. Koch) チュウガタシロカネグモ
23. *L. magnifica* Yaginuma オオシロカネグモ
24. *Tetragnatha javana* (Thorell) オナガアシナガグモ
25. *Lycosa pseudoannulata* (Boes. et Str.) キクスキドクグモ
26. *Oxyopes sertatus* L. Koch ササグモ
27. *O. macilentus* L. Koch シマササグモ
28. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ
29. *M. japonicus* (Boes. et Str.) コハナグモ
30. *Thomisus labefectus* Karsch アズチグモ
- 31. *Xysticus croceus* Fox ヤミイロカニグモ
32. *Oxytate striatipes* L. Koch ワカバグモ
- 33. *Tibellus tenellus* (L. Koch) シヤコグモ
34. イボカニグモ
35. *Hasarius adansoni* (Audouin) アダンソンハエトリ
36. *H. doenitzi* Karsch デーニツツハエトリ
37. *Menemerus confusus* Boes. et Str. シラヒゲハエトリ
- 38. *Silerella vittata* (Karsch) アオオビハエトリ
39. *Rhene atrata* (Karsch) カラスハエトリ
40. *Marpissa magister* (Karsch) オスクロハエトリ
41. *Jotus difficillis* Boes. et Str. マガネアサヒハエトリ
42. *J. abnormis* Boes. et Str. チャイロアサヒハエトリ
43. *J. linea* (Karsch) マガネアサヒハエトリ
44. *Plexippus setipes* Karsch ミスジハエトリ
45. *P. paykulli* (Audouin) チャスジハエトリ
- 46. *Evarcha albaria* (L. Koch) マミジロハエトリ
- 47. *Clubiona vigil* Karsch ムナアカフクログモ
48. *Heteropoda forcipata* (Karsch) コアシダカグモ
49. *Gnaphosa kompirensis* Boes. et Str. メキリグモ

クモの共存

小野展嗣

クモは一般に単独で生活する。その理由は肉食性であるということばかりでなく、もともと他者を排斥しようとする本能が強いためである。孵化直後の若令幼生期には集団を作ることがあるが、それ以後はクモ同志でも他の動物とでも共存することはない。性交渉のときでさえややもすると雄は雌に食われてしまう程である。造網性のクモでは網や住居が自づと“なわばり”になる。またハエトリグモのように徘徊性のクモでも行動範囲が決っており、生息密度が高い場合にそれぞれの行動範囲が重なり合っても、瞬間的には個体間には一定の距離が保たれている(水野・舟川、1956^{*})。

このようにクモは排他的で他のクモや動物とは共存できないのが普通であるのだが、同種間で集団生活(クモの場合社会生活という言葉を使用するのには疑問を感じる)をするクモや、他の動物(アリなど)と共生するクモがわずかに知られている。前者は外国産のヒメグモ科、ウズグモ科、イワナグモ科などに属する数種で、日本産のものでは知られていない。後者の方は、日本でもアオオビハエトリとアリマキに関する報告がある。(植村、1964^{**})。アオオビハエトリがアリと同様にアリマキの腹部をたいて蜜を出させてそれをすするといふ事実の発見である。本来肉食性であるクモのこのような異常とさえ思われる行動は、一体どのようにして培われてきたのであろう。植村先生は“肉食性の動物が他の動物と共生関係を結ぶに至る初期段階は、そのような偶然から出発して、次第にそれが本能にまで発達していくのではないか”と言っておられる。筆者はその点に少なからず共鳴している。こういふ事と多少とも関係のありそうな記事を筆者の野帳より二つばかり拾い出してみた。

1968年6月21日、東京の学習院大学構内の樹林での観察である。高さ3mばかりのツバキの木にクサグモ(*Agelena limbata*)が柵網を張っていた。クモは亜成体で網もかなり大きい。よく見るとその網の真下にそれと丁度平行に3cmぐらいの間隔をもつてウズグモ(*Uloborus varians*)が渦巻き状のかくれ帯をもった円網を張っていた。面白いと思ってその木をぐるりと観察してみると、その木にはクサグモが5個体ウズグモは4個体生息していた。ところが、ウズグモは4個体が4個体全部それぞれ別のクサグモの網の下に平行に円網を張っているのである。この光景は偶然とも偶然でないとも考えられる。しかし、ウズグモにとって何もクサグモの網の下でなくとも造網に適すると思われる環境はいくらでもあったのだし、かと言って付近を捜してみたがウズグモは他には1個体も見当たらなかった。筆者には偶然であったとは思われない。ウズグモが造網場所を選択したものと考えたい。それでは、偶然とも思われるこのことがウズグモに、またクサグモにどのような意味をもたらすのだろうか。そういった疑問に答を出すべく観察を続けようとしたが、残念にも22日夜の強雨でクサグモの網も破れウズグモも全く姿を消してしまった。それ以来一度もあのような光景は見られない。

参考までに、外国産の*Uloborus*では、ベネズエラ産の*U. republicanus*やシンガポール産の*U. raffrayi*など集団生活をするものが知られている。実見したことはないが多くの個体がそれぞれ小さな網をつくり、それらが集まって大きな網を形成するということである。

もうひとつは、同じく学習院構内の『血洗いの池』という小さな池の周囲の樹林で1969年

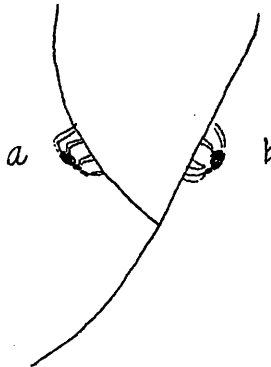
* 日本の生態学会誌 6-3

** 自然の観察 Ⅱ 24・25

10月6日の観察である。筆者はジョロウグモ (*Nephila clavata*) の接触した二つの網を発見した。図のように二つの網が中心より少し下のところで接触している。aの網は長さ約20cm、bの網は約22cmである。クモの方は、両方とも体長12mm程の小さな雌の成体である。また、どちらもやせており腹部にもつやがない。最初は風か何かによって偶然に接触したのであると思ったが、接触の仕方から見るとそうは言い難い。ワク糸を共有している。馬蹄形の主網のまわりに張られた補助糸は、どちらの個体が引いたのか区別できない。また、両方の網の間にはそういう糸は張られていない。そういった点や網の傷み具合からも、数日はこのままの状態であったと考えられる。この二個体のジョロウグモの雌は、明らかに共存していたものと思う。

院内においてジョロウグモは毎年多産し、少なくとも去年(1968)までは『血洗いの池』の付近の樹間に所狭しと過密的に造網して、共食いも観察された程である。ところが、今年はどういふ訳か個体数が去年より激減し、それぞれの個体を見ても体長が30mm前後の大きいものは僅か、20mm以下の小さなものばかりである。そのために例年のような過密的な大集団は形成されず、個体としても集団としても実に貧弱に思われた。今回共存状態が観察されたジョロウグモは、その『血洗いの池』付近の貧弱な集団から更に数10m離れて孤立しており、付近にはジョロウグモは1個体も生活していなかった。

自然環境の中では、クモのような排他的な動物でもその群集において互に影響を及ぼし合っていると考えられるが、その群集におけるその種の生息密度が非常に低い場合や、今回のジョロウグモのように集団から隔離されて孤立した場合は、天敵から狙われる可能性も大きくなり、いろいろな面で生活していく上に不利な点も多いと思われる。このように自然群集における種の生態的地位といったものが貧弱になり、生命を維持し種族を維持していく上で、不利な状態になったとき(或はもっと有利な条件に出合ったとき)にはクモのような単独生活性の動物でも偶発的或は必然的な条件から共存という現象も起こり得るのではないかと筆者は考える。今回のジョロウグモにおいても共存という状態は偶然に起こったのかも知れないが、そこには何か意味があるように思われてならない。



KISHIDAIA Ⅷ11

1969年12月9日 印刷

1969年12月10日 発行

東京蜘蛛談話会

〒191 東京都日野市豊田1896

萱 嶋 泉 方

TEL 0425 (81) 7128